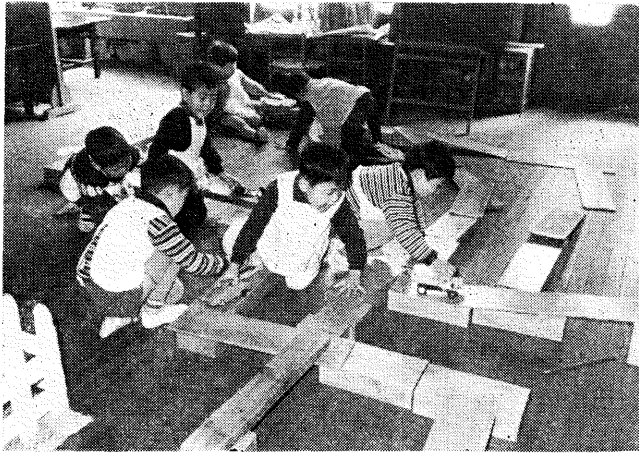


●自発的にあそびに参加できる。
 ●あそびの役割をはたす。
 ●あそんだあとの始末がすすんでできる。
 また友だち関係にも巾が出て来てグループであそぶことが多くなり、いわゆるごっこあ



高速道路つくってあそぼう

そびが盛になってきた。例をとってみると、幼稚園ごっこ・お店やごっこ・パトロールごっこ・高速道路線の建設・動物園ごっこ・アトムごっこなどのあそびがくり返し行なわれ、次第にそのあそび方も複雑になっていった。またこの学期には、教師の側からの働きかけで劇あそびの簡単なものやってあそんだこともある。

ごっこあそびの盛になったことの原因は、友だちあそびが活潑になったことと、大ぜいのグループ（級全員であそぶという形もよくとられたが）のあそびがおもしろくなってきたことにあるといえよう。そしてはじめはみながばらばらであったのが、友だちとあそぶ楽しさを知り、それをより

楽しく続けるために、個人個人が社会性を伸ばし協調性を高めることの大切さを自然と身につけていったことも大きな要素となったと考えられる。

* * * *

三学期はみんなであそぶ楽しさを心から味わった。しかし学期末にかせなどで欠席の子どもがぼつぼつと歯がぬけたようにいると、子ども側からも友だちを待つ気持が強くなってくる。そのような折に来年度はもっと友だちが多くなることを話すと、そうしたら今までよりもっと大ぜいであそぼうと期待し、新しく入る友だちと一しょに始まる四月の新学期を楽しみに待つ心が日に日に育つのであった。

四才児の友だち関係とごっこあそび

関 治 子

四才児の一年間の生活を通して、教師の意図と、幼児の活動の実際をとりあげ、再考してみたいと思う。

三才児として一年間幼稚園生活を送った十五名に、新入の二十名を加えた三十五名の組である。何日かたつ間に、幼児期の特徴とは

教師も一しょに野球をする



いうものの、自己主張の多い、自己中心性の強い幼児が多いことを感じた。そこで、

四才児の組の指導目標

○幼稚園生活を楽しむ

○生活習慣を身につける

○友だちと協力してあそぶ

○創意ある表現をする

更にこの組としての指導目標

○友だち関係（教師との関係も入る）と幼稚園生活（社会生活）を円滑に進めていく

このような点を強調して指導していく必要があると考えた。

友だち関係

四才児の組の四月に、よく経験することであるが、新入の幼児の方が、何人かの例外を除いては、緊張しながらも、楽しくあそびはじめ、三才からいる方が、何か不安定な状態がみられたりする。三日目位になると、あそびに調子が出てくるが、新入の方が、興奮状態なのか、遊具をどんどん移動したり、乱暴に扱ったり、あそびの持続時間も短く、前からの幼児の方も、それにひきずられるありさままで、何とも落ちつかない。あそびらしいあそびも発展しない。一週間位すると、前からの幼児同志がグループになってあそびはじめた。こちらも、つとめて集団あそびなどで、いろいろな友だちと共にあそぶ経験を入れて

いく。だんだんに各種の遊具への興味を示し、あそび方も工夫するようになってきた。

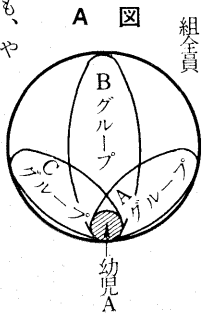
こうしていくうちに、友だち関係が固定しかけてきたが、その間にも、衝突があったり、泣いたり慰め合い、仲なおりしたりというように、変わっていることがある。

友だち関係をみていると、登園直後に一しょにあそぶ友だちと、暫くたってから一しょにあそぶ友だちというように変わる場合、また一つには、あそびの種類によってAグループとあそんだ後、Bグループと一しょにあそぶ場合とがある。つまり、A図のように、組全員の中に、何人かよくあそぶ友だちが大体きまっっていて、その中で時と場合によってAグループ、Bグループをなすという傾向にあるようだ。

中には、はつきり三人だけのグループに固定している場合もある。また、一人ぼつんとして積極的組全員にあそびに入らず、

皆の動きをみてい

る幼児Bにも、や



はりA図の動きがあることが確かめられた。

一学期の間は、この動きがはげしかった。

人数も二人から四、五人というところで、多い時には、二種類の平行したあそびで、九人ということもあった。

二学期三学期の間に、あそぶ友だちのすつかり変った幼児もあるが、あそぶ友だちの顔ぶれが決っている幼児もあり、三学期の終わり頃は、割合はつきりきまっていたと思われる。

友だちの関係は、ある程度、安定感をもっていることが必要だが、余り特定の人だけに固定してしまうのは、よくいっている場合はよいが、独占、排他、主従関係におちいつてしまう場合も考えられるので、A図のようになっていくことが望ましいのではないかと考えている。

次に、これは幼稚園であらわれた性格を含めての友だち関係の特徴を捉えた例として挙げてみることにする。

一学期の終りに、母親たちと、幼児についての話し合いの機会を持った。幼児同志が、よく一しょにあそぶということではなくて、話

題や問題の共通と思われる数人ずつを、私が選んだ。

Aグループ。小学生の兄弟をもつ末子ばかりで、友だち関係がスムーズにすべり出さない。自己中心になることはないが、意志が強く、やたらな妥協をしない。

Bグループ。長子の男児ばかり、何れも一、二才の弟妹がいる。一人ひとり、気持はやさしいのであるが、幼稚園という社会集団の中では自己中心的、時には攻撃的で、なかなか自己というものの調節がとれない。

Cグループ。長

子の女児ばかり、何れも一才から三才の弟妹がいる。

大体自立心が強く、身のまわりのことや約束などはよくわかり、友だち関係も、比較的スムーズにいく。

Dグループ。環

境は異なる、陽気だが、はにかみが強

く、不和雷同型、しかし、グループ意識は強い。

Eグループ。女児ばかり、何れもまだ友だち関係が不安定、性格は異なる。

Fグループ。男児ばかり、素直で友だち関係も抵抗感がないが、強いものにおされ易い。

D、E、Fは二学期三学期と経ていくうちに、大分特徴や、性格のあらわれ方に変化があったが、A、B、Cは、兄弟関係という環境からくる共通のものがあるのだとしたら、



お家ごっこの役割をきめる

友だちと花「もんめをしてあそぶ



と考えさせられてしまった。

幼児のごっこあそび

次に、この一年間の幼児の活動の中から、四才児としてのごっこあそびの実態を実例にそって二、三記してみよう。

1. 運動会ごっこ

春に、小運動会を経験した。友だち、母親と共に、ゆうぎ、競技をしてあそぶ。次に、いろいろな領域で、これを再現する。展開してあそぶことを考えた。たまいの場面を、皆で、赤白の球をつくって、壁面の網の中にはりつけたり、人物をはりつけたりする。音楽リズムの面で、運動会ごっこから、オリンピックごっこと称して、開会式、水泳競技、陸上競技などのまねをしてあそぶ。体操やダンスを、創作(勿論初歩のもの)をして、やってみて、皆にまねをしてもらう。また、ラリーに似た競技をしてあそぶ。これらは、大体一学期のことである。

2. 電話ごっこ

日常、ままごとやのりものあそびは、電話を使う場面がよくみられる。電話のみならず、組木で無線のマイクを作って、話したり、こういう会話は、あそびの上でも重要な役割を果たしている。二学期に、電話ごっこのうたを覚え、それから歌詞をかえて、「たろう」というところを、この組の幼児の名を入れて「はいはい、私はひでとです」。次に「ままごとあそびをいたしましよ」の

ところを「エイトマシンあそびを……」。こうして、皆と一しょにうたうことをしてみた。

だんだんに、この歌から離れて、自分のなりたい人物になって、電話で話をした。はじめのうちは、私が、助けて、三人の会話のように中継していたこともあったが、時間をかけていくうちに、口数の少ないD子が、母親になりきって、「今、お洋服をぬっているところですよ」「誰のですか」「ママのです」。などと話し出すと、ほほ笑ましい。口の達者なE夫は、「こちらは〇〇会社の人事課です。あ、ちがいました。庶務です。今度庶務になったんだ。はい、今、ちょっと忙がしいんですけど」。F夫は、「今、ロケットに食糧をつみこんで発射します。こんな調子の話がつづく。G子は、「おかし屋さんですか。これからお誕生会をしますから、ケーキをもってきて下さい」。また、お当番になった人が、マイクを使う感じで、皆に伝言したりというようにしてあそんだ。

3. お店やさんごっこ

組合員が、さく画からぬけ出して、絵をかくことが、大分はやって好きになってきたのが、二学期の半ばすぎ、そこで、二学期末に

絵によってあそべる「絵合わせ」をつくった。説明や、紙を切ることなどは教師がして、あと、わかるような絵をかくのであるが、これは、要領がわかると何でもないのであるが、兎なら兎を紙一ぱいにかくということが、なかなか四才児にはできにくい。そんな場合には、一枚の紙に兎を二つでも三つでも、余白のないようにとことばをはさむ。こんな経験を経て、目的をもった製作や話し合いを、三学期に「お店やさんごっこ」として計画した。ままことからお店やさんがよくみられる。中でも、絵本のうりかいあそびなどさかんで、うりかいは興味も大いにあるところである。

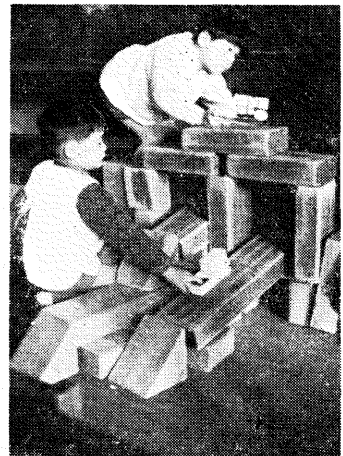
幼児の製作物(うるもの)が相当数必要で、いろいろとつくらねばならないが、興味の持続も考え合わせ、三学期はじめには、お店やさんごっことして幼児に話すことはさし控えた。そして、ぼちぼち製作物を揃えていった。

一ヶ月たった二月八日、室内あそびの多い時機で、おかしや、パンやなどお店ごっこも多し。でき上った製作物を示して、「お店やさんごっこ」の相談をもちかける。皆、目の色を輝かせて相談ののってくる。皆の考えたお

店は、おもちゃや、おかしや、本屋、果物や、酒屋、花屋、おそばや、かぼんや、お人形や、デパート、自動車や、お魚や、である。今、うるものができているのは、お人形や、かぼんや、本屋、あとはおかしやと花屋かくだものやということになった。次の日になって、「先生、私、おかしやと花屋がいいと思うわ。考えてみたんだけど」といって一生懸命のH子もいた。その後、相談しながら製作をつづけていったが、二月中旬に一週間のブランクがあった。(入試のため休園)ひな人形づくりから、こけし、壁かけ人形、指人形と、お人形やの材料も数がふえてきた。

三月四日、いよいよ十三日に開店して、他の組の方に買いきて頂くことになった。皆も、はりきっている。三月十二日、売る人をきめる。希望のお店をきめるが、多いところは話し合いで少ないところに行く。お店のかざりつけ、ねだん表づくり、招待状を出す、おつり銭づくり、などがこの日の仕事だった。

三月十三日、お店やさん開店
お人形やさん(人形、動物、ロボットなど)



協力して高速道路をつくる

おすもう、こけし、
つり人形、赤ちゃん人形、
指人形、手足のうごく人形
かざり人形

(材料は紙・布・牛乳のふた紙・モ
ールなど)

かぼんやさん
おさいふ、バスケット、ハンドバッグ、
かぼん

(材料は紙・箱など)

本屋さん

絵本(物語、親指姫・三匹の子豚・エイ
トマン・「ようちえん」など)何れも字
はなく、表紙だけ字をかいたものもある。



おかしやさん

キャラメル、あめ、

チョコレート、ビスケット

(材料はタバコの
空箱・牛乳のふ
たとふた紙・ス
ボンジ・段ボ
ル・クレラップ
・銀紙など)

登園した幼児から、売るものだから大切に扱うということで、組の中で、自由に売買してあそぶ。いささか、興奮気味だが、活潑に大喜びであそび、つり銭を配分したり、おもしろそうにあそんだ。その後、お店を整理して、いよいよ、交代制でお店の人になることにして、買いにきて頂く。声をからして「いらっしやい!! いらっしやい!!」と大さわぎ。そうかと思うと、

だまって、そっと、売るものをさし出す幼児もいる。昇奮のさめやらぬまま、四、五分であらかた売りつくして、お店やさんはとじられた。残品を二点ずつ組の中で買ったが、自分個人のものという概念がすっかり外れたのか、自己主張もなく、静かに選んでいった。組全体の一つの目的である活動に、それぞれが向いたように思う。興味、程度に個人差はあるが、協力してつくるのか、かわるがわる売り手になるなど、多面的な活動で、作品としては、それなりにつたないものだが、四才児としての協力ということをも身につけるには、無理なく入れるよい機会であった。興奮をどのように処理するかは、教師の問題として反省している。

四才児のごっこあそびは、一年間に、随分変化し、成長していくものである。勿論発達段階とは思いますが、教師が、はじめは中心になつたり、或いはかじをとったり、助言や補佐にまわつたり、見守るなど、幼児の活動をよくみて教師としての行動を判断することも必要と痛感する。一年終った現在、個人差はあるが、四才児として活発な活動がみられるようになったことは嬉しく思われる。